日本語方言における語アクセント「紅葉」の現代史

江端義夫

はじめに

本稿では、複雑な様相を見せ、解釈困難な中部日本の方言における語アクセントの中から、三拍語の「紅葉」を対象にして当該地域の方言地図を作り、そこに描かれた分布状態を音声次元に立って解釈を行うことにより、音韻的な解釈では得られなかった微細なアクセント変化の過程を明らかにすることを目的としている。

一、三つの課題

三つの課題を設定して、「紅葉」の方言地図を解釈したいと考えている。

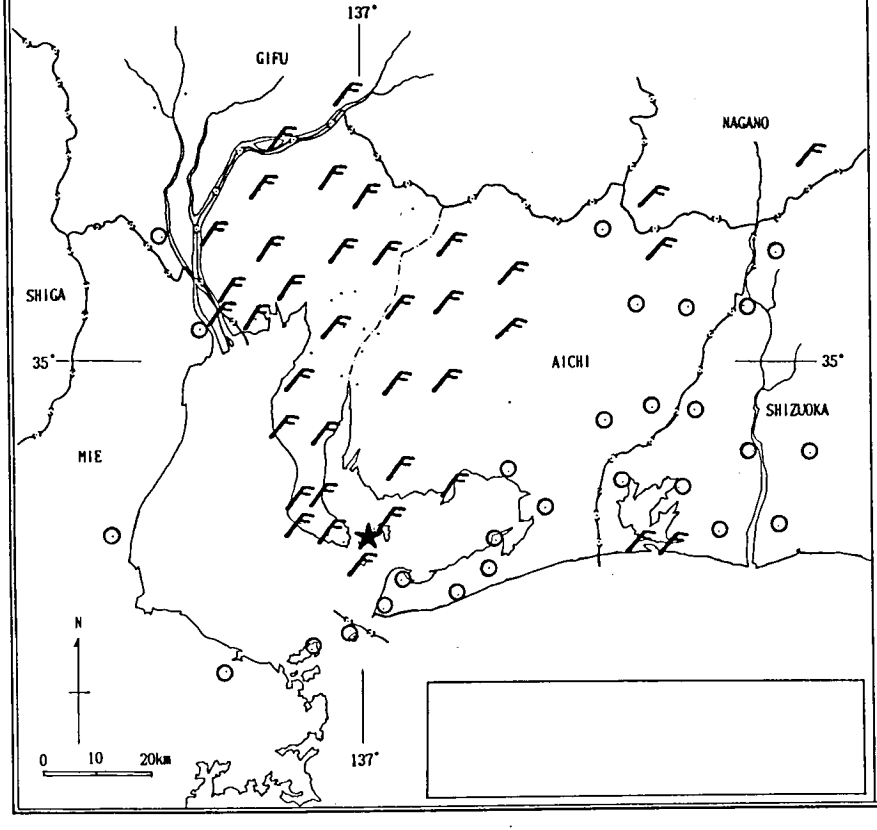
一つめの課題は、「語アクセントの地理言語学的研究法の可能性」についてである。W・A・グロータース氏は日本ではじめて、房総半島のアクセント地図について地理言語学的な解釈を試みられた。その論文の末尾に、中国語でも日本語でも「個々の語のアクセントについて、その地理的分布を分析するほど研究は進んでいない」と書いておられる（『日本の方言地理学のために』平凡社、昭和五一年一一月、一九四頁）。その後の方言地理学的な研究においても、方言地図に現れた分布を克明に分析する研究は稀で、金田一春彦博士の示された類別語彙概念の適用で済ませてしまう研究が少なくない。地理言語学の見方から、アクセントの音声変化を考察する研究は進んでいない。結局、地理的に連続した地域における方言アクセントの変化を分析する場合に、一語一語がどのような形態になっていて、それらのアクセント変化の原因がどのように考えられるかという点についての研究は、まだ未開拓なのである。一枚一枚の言語地図を丁寧に解釈していく地道な作業が期待されるであろう。それの試みを本稿で行いたい。

二つめの課題は、次のとおりである。柴田武博士は昭和一三年から一八年にかけて方言調査をなさって、「愛知県のアクセントの分布」という論文を発表なさった。この優れたご報告によると「紅葉」の等語線は東三河と西三河との間に引かれている。半世紀後の筆者の方言調査結果とそれとを比較することによって、アクセントの変化の動態について考えてみたい。

三つめの課題は、馬瀬良雄氏が論文「川中島平及びその周辺地方のアクセント分布とその推移―三モーラ名詞を中心に―」（『長

第一図

モミジガ(紅葉が)　(老年)



○	モミジガ [momizigа]		
F	モミジガ [momizigа]		
★	モミジガ [momizigа]		

野県短期大学紀要』二〇、昭和四一）の中で推論なさった「紅葉」のアクセントの解釈についてである。馬瀬氏は老年層のアクセントの○●○△が、ことごとく●○○△になったのは、「この語が主として小学校入学以後覚えることばであり、教師やラジオ・テレビなどを通して学ぶ機会の多い語だという点を挙げたい」として、氏の有名なテレビ原因説をここでも力説なさっている。そこで、地域を拡大して中部地方全域に範囲を広げた場合にも、テレビ説で解釈できるかどうかについて、検討してみたい。

以下、これらの課題を含みつつ、方言地図の解釈を行う。

二、中部日本言語地図「紅葉」の現代史

（一）愛知県地方の老年層における「紅葉」のアクセント史

1、第一図の解釈

第一図（前頁）は、愛知県地方の老年層の「紅葉」の方言地図である。昭和四一年から昭和四三年にかけて方言を調査した結果が分布図に描かれている。この図を見ると、三重県側に分布する●○○△が注目される。服部四郎博士が発見された東西方言アクセントの境界は、この「紅葉」の地図でも同じように木曽川・長良川を境にしている。県境を越えて愛知県に入ると、○●○△のアクセントに変わる。その分布は江戸時代の藩領での尾張藩の全域に及んでいる。知多半島も全てが、この中高型のアクセントになっている。また、西三河地方も、○●○△のアクセントであり、その中心地の岡崎市も○●○△のアクセントになっている。尾張藩の中心地は、もちろん名古屋市であるが、ここも、○●○△のアクセントになっている。こうして見てくると、愛知県の西側の三分の二の地域が○●○△のアクセントであることが分かる。この○●○△の分布領域の中では、全く他のアクセント形式が存在しない。それほどに強固な制約性をもって、この型が意識されているのである。

さて、その東側に、また頭高型の●○○△のアクセントが分布している。ここが東三河地方であり、その中心地は豊橋市である。飯田線の鉄道沿線には、●○○△のアクセントが見える。さらに渥美半島の全域にも●○○△のアクセントが分布している。県境を越えて東側の静岡県にも、●○○△のアクセントが広く分布している。ただし例外として、浜名湖の東と西に、○●○△のアクセントが分布していて、相互の関係を考える上で、参考になる。

次に、三河湾に浮かぶ島の一地点だけに、○●●△のアクセントがある。

愛知県の「紅葉」の老年層では、このような単純な様子になっている。この分布から、どのような歴史を読みとることができるであろうか。筆者は、それを次のように考えてみた。

●○○△　→　○●○△　→　○●●△

上のように推定した根拠として、隣接する二地域の自然推移をまず、第一に考える。東三河の●○○△と三重県側の●○○△とは形は同じではあっても、時代が異なる。すなわち、東三河の●○○△は、古い時代の名残りである。それに反して三重県側の●○○△は、かつては東三河と同じ形であったが、多様な変化過程

を経た後に、○●●▲を経て、再び●○○△に戻ってきたと解釈したい。(三重県側の●○○△は平安末期以来変化しなかったと考えられなくもないが。) つまり、伊勢・志摩の分布と渥美半島の分布が連続しているので、古い●○○△が、共通に周辺での分布連続を示しているように見えるが、それぞれが異なる歴史をもっているのである。

2、柴田武博士の昭和一〇年代の結果との比較

柴田武博士が小学六年生男子を対象にして調査なさった結果は、筆者が昭和四一年から四三年にかけて調査した結果と非常によく似ている。第一図で見られたように、「紅葉」のアクセントの境界は東三河と西三河の境界と重なる。この点で全く同じである。しかし、大事な相違に注目しなければならない。それは、柴田武博士の地図では、渥美半島の先端にある伊良湖岬村伊良湖は○●○△となっている。その他の渥美半島の全地点は●○○△である。筆者の調査では、第一図で見られるように渥美半島の全地点が●○○△になっているので、かつては○●○△の勢力が強かったことが分かる。尾張藩や岡崎藩のアクセントであるところの○●○△が、西から東へ向かって進行したのであろう。島嶼部にも伝播した○●○△は、この渥美半島の先端の伊良湖にも早く伝播したのであろう。柴田武博士の調査された昭和一三年ころには、もうそれが見られたようである。しかし、それが今回は、伊勢・志摩地方も東三河や静岡地方も●○○△であるために、一人だけ孤立することができなくなって、伊良湖の○●○△は、ついに●○○△に変わってしまったのである。それは、音韻変化ではない。周辺との付き合いからの必然によるコミュニケーションの圧力である。伊良湖以外の陸続きの周囲と同じアクセント形式へと変えざるをえなかったのであろう。

もう一つ柴田武博士の地図と筆者の地図との結果の違いがある。それは、第一図の浜名湖の周辺で二地点に見える○●○△のアクセントである。ただし柴田武博士は、静岡県の調査はなさっていない。どうして、東三河や静岡県に盛んな●○○△の分布の中に、ポツンと二地点だけ、○●○△のアクセントが存在するかを考えたい。これは、昭和四一年から四三年の高度経済成長期には、名古屋経済圏の威勢は著しいものがあった。したがって、京都や名古屋の文物が西から東へと伝わるのと同じように、尾張・岡崎のアクセントである○●○△が、東三河を飛び越えて浜名湖へと伝わったと解釈される。それ以東へはまだ及んでいない。この時期は、中高型の○●○△が洒落た感じの粋なアクセントと見られていたにちがいない。

そうは言うものの、かつて柴田博士の調査では伊良湖に見られた○●○△が筆者の調査した第一図では、消えてしまっている。その代わりに、●○○△に変わったということも事実であり、晴れ舞台にある東海道沿岸での表向きの理由と、辺地での威圧を受けての変容との違いが察せられる。

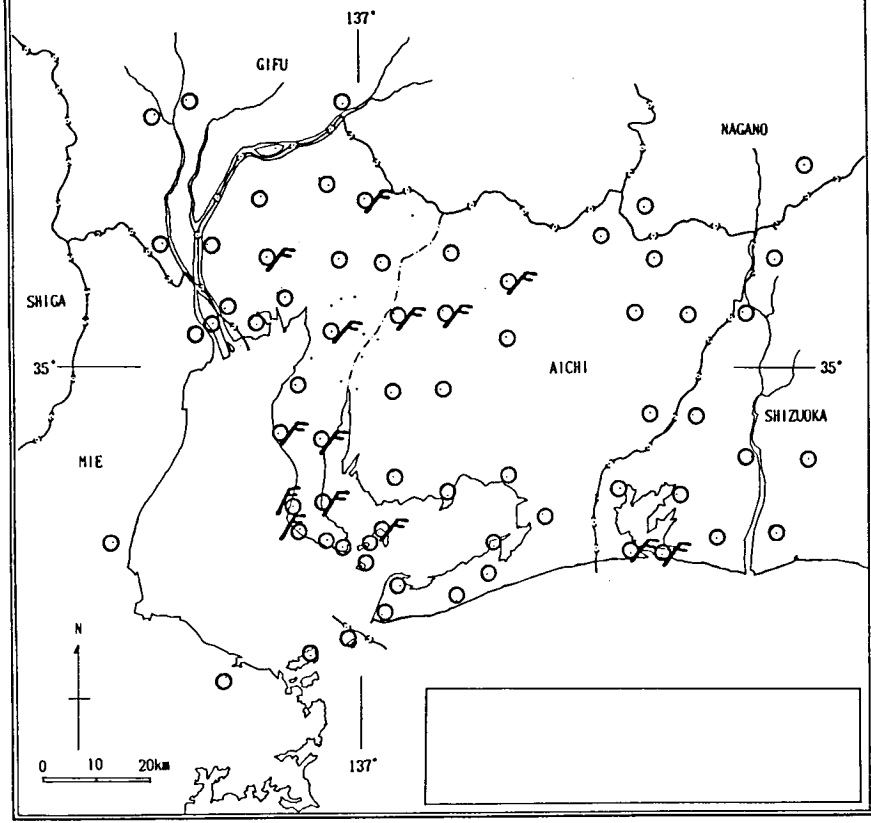
(二) 愛知県地方における少年層の「紅葉」のアクセント史

1、第二図の解釈

第一図と第二図(次頁)は、全く同じ時期に調査された資料に

第二図

モミジガ(紅葉が)　(少年)



○	モミジガ [momizigа]		
∮	モミジガ [momizigа]		

基づいている。老年層と少年層との年齢差は約五〇年である。

全域に広く遍く●○○△のアクセントが分布している。頭高型のアクセントが全域を占領してしまったと言ってよい。単独で○●○△のアクセントを維持する地点はなくなってしまった。中高型のアクセントを持つ地点も必ず●○○△のアクセントと併存している。それほどに頭高型のアクセントの威力が強くなっている。

分布を詳しく見つめると、三重県側からも●○○△のアクセントの侵略があって、三重県に接した愛知県内の各地で中高型のアクセントが失われている。また、西三河の中高型のアクセントも、東三河の頭高型の●○○△のアクセントに侵略されて、徐々に頭高型に変えられてきている。

もともと、愛知県の東三河の●○○△は古いアクセントの名残りで、三重県側の●○○△は新しいアクセントであると解釈していた。しかし、双方のアクセントの語形が同じであるために、中京文化地域の威光であるところのアクセント○●○△でさえも、老年層の真似をせずに、さらに次の段階へと進もうとした。静岡県の二地点に○●○△のアクセントが分布する点で、全く年層間にアクセント分布領域の範囲差は無い。しかし、確実に○●○△の分布量が激減して、その代わりに、●○○△のアクセントが激増した。その理由は、第二図によれば、次の二つである。

a、近畿と東三河以東が●○○△であり、両方からの圧迫を受けて○●○△は退縮した。

b、東三河以東の古いアクセントの●○○△は、東日本に広く分布して共通語のアクセントという威光を獲得したので、少年層ではこれを尊いものと見なして、名古屋・岡崎から入ってくる○●○△に抵抗を示すようになった。その結果、●○○△のアクセントが獲得され得た。

以上の解釈が無理なく、提示される。テレビの影響で説明するよりも、合理的ではないだろうか。老年はテレビのアクセントの影響を受けず、少年だけがテレビの影響を受けるというのもおかしいので、地理的な分布だけで説明した。今は共通語ではなくなった近畿アクセントも、「紅葉」については●○○△であることを考えると、長野県地方の特例と言えるのかどうか、改めて問題にしなくてはならない。

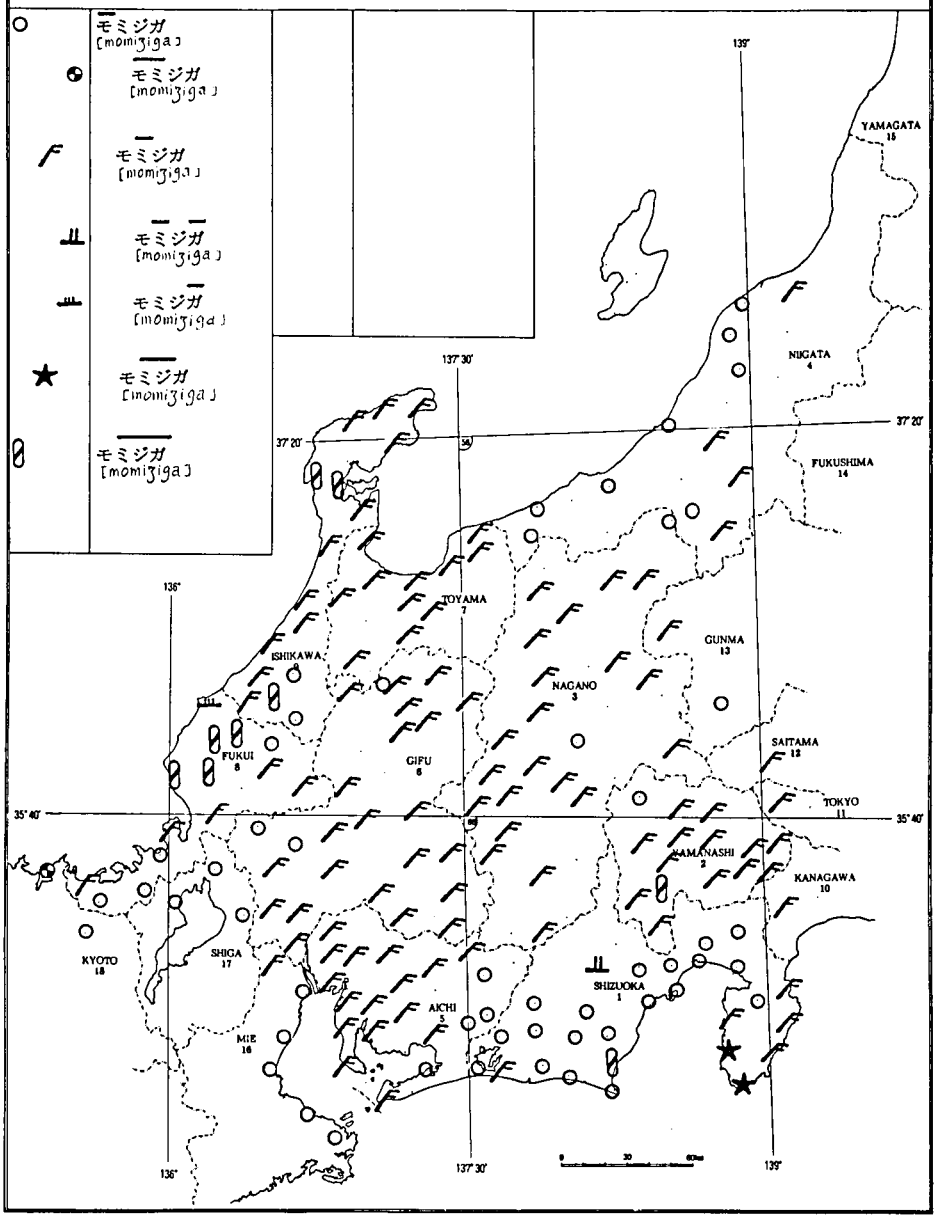
(三) 中部日本言語地図における老年層の「紅葉」のアクセント史

1、第三図の解釈

第三図（次頁）は一九七六年の方言調査によって得られた資料で作成されている。第一・二図から一〇年が経過している。この間に東京と大阪を結ぶ地域の中間にある中部日本の東海道側は著しい発展を遂げた。名古屋市を中心とした工業化の波は、知多半島を都市化してしまった。また豊田市を中心とした自動車産業が尾張と三河とを結び付けて、一大都市を作ってしまった。いくつもの高速道路が出来、人々は自由にこの地域を往来するようになった。

さて、そうではあるが、第三図を見るかぎり、全く、社会のめまぐるしい変化や文物の往来とは無関係にアクセントは厳然と独

第三図　　モミジガ(紅葉が)　　（老年）



自の進み方をするものだということが分かる。具体的にそれを説明してみたい。

「紅葉」のアクセントは、第三図を見ると、東と西とに分断されている。分布はつながっていない。西と東に離れて、●○○△のアクセントが分布している。そして真ん中に○●○△のアクセントが分布している。この関係は、先に第一図で見た関係と全く同じであり、それを拡大して延長したものが、そのまま中部日本方言アクセントの実態となっている。

a、古文献に照らしてみた「紅葉」のアクセント

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編『日本語アクセント史総合資料　索引篇』（東京堂出版、一九九七年）によると、「紅葉」のアクセントは古文献に、次のように出てくるという。

平家正節　●●○

和字大観抄　●●●　または　●X○

現代京都アクセント　●○○

現代の京都アクセントは、昔のような高音の連続が見られないので、新しい形のものである。今の京都アクセントとは違う古い形のものは、第三図では、京都府北辺の一地に見える。当該地、舞鶴市西舞鶴には、●●○のアクセントがあり、『平家正節』のアクセントと同じである。このアクセントから●○○アクセントが派生し、中部日本へと伝播したものと考えられる。また、同じようにそれは北陸地方へも伝播したとみなされる。

b、実際の分布から見た「紅葉」のアクセント

北陸地方に平板型のアクセント○●●▲が分布している。高音連続のアクセントがかなり変化して、ついには平板型に落ち着いたことを示している。また、その次の頭高型●○○△へと移行する様も見える。この状況は中部日本の東はずれの伊豆半島南部や御前崎近く及び山梨県南部などにも辿られ、古いアクセントの成れの果てが、平板化になっている。平板化の次に起こるのは、●○○のアクセントでなければなるまい。こうして、近畿には、新しく●○○のアクセントが分布して当然ということになる。また、そのような現状が見られる。

そこで、第三図での解釈は、表1（本頁左端）ように推定される。

こうして、北陸地方や近畿地方にも●○○△の起こる必然性が生まれている。また、中部日本南部の静岡県や山梨県でも●○○△の起こる下地ができている。こうした活発な変化のきざしが見てとれるのである。

表1

●●○△　↓　●○○△　↓　○●○△　↓　○●○▲　↓　○○○▲　↓　●○○△

↓　○●●△　↓　○●●▲　↓　●○○△

（四）中部日本言語地図における少年層の「紅葉」のアクセント史

1、第四図の解釈

第三図から一三年後の一九八九年に少年層の調査をはじめた。一九九一年まで三年かかった。

少年層の第二図と第四図（次頁）とを比較すると二三年間の経過がある。この時間的な経過は、方言の変化を見る上で、非常に有効であった。

第四図を見ると、第三図とは全く違って、全域に●○○△のアクセントばかりが分布している。目を疑うばかりの変わりようである。老年層では、中部日本の各地に色濃く分布していた○●○△のアクセントが、北陸の四地点と山梨の一地点を除いて、完全に消えてしまったのである。これは確かに、驚くべき極端な変化である。第三図では、○●○△のアクセントが中部日本の全域に向けて東漸していく様子がはっきりと見て取れる。このまま行けば、古い●○○△のアクセントは早晩駆逐されて、○●○△ばかりになってしまうだろうと、推定されもしたのである。

しかし、実際は予想をはるかに越えていた。第四図の少年層では、第二図よりも一段と徹底的に○●○△というアクセントを捨ててしまって、どこもかしこも全て、●○○△のアクセントに塗りかえてしまったのである。ただし、北陸の数地点には、古いアクセントの残滓が見える。それらの他は、新しく発生した●○○△のアクセントばかりである。いやしかし、古い●○○△のアクセントも存在するかもしれないが、東西両方言のアクセントが一致して●○○△のアクセントになっているから余計に、●○○△のアクセントへとすり寄せられていくのであろう。

さらに注目させられるのは、静岡県地方の各地の老年層で特別なアクセントを見せたのが、ことごとく消えてしまったという点である。

なぜ東西の両方から挟み撃ちにされた○●○△のアクセントが消えてしまって、その代わりに●○○△のアクセントが広域に分布したのであろうか。

三、諸学説への対応

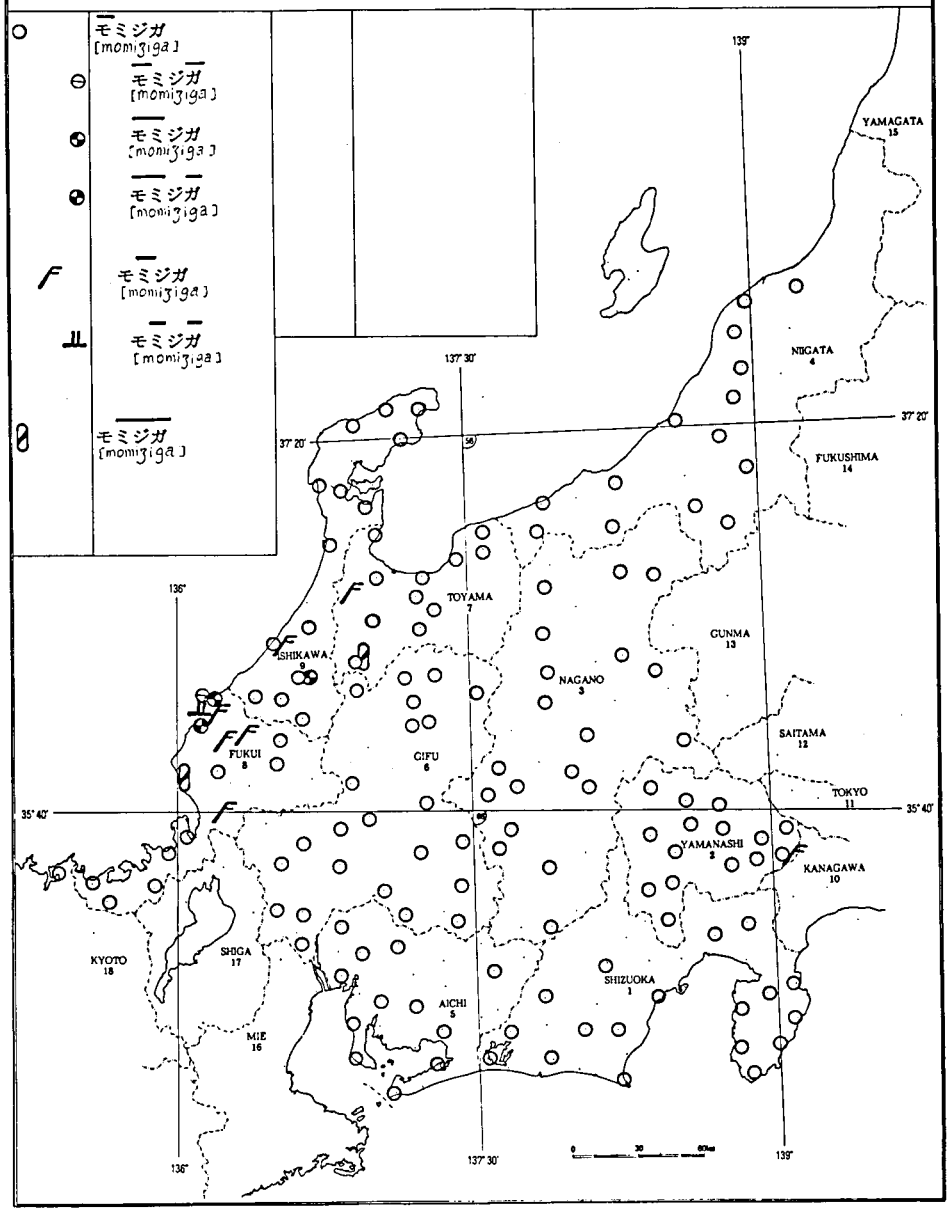
(1) 語アクセントの地理言語学的な研究法の可能性

金田一春彦博士の『国語アクセントの史的研究　原理と方法』には、「紅葉」が「命」類に一応所属させてあるものの、米印が付されていて、「平安朝の文献でまだ例証されていない語」（六二頁）との注記が見える。また『国語学大辞典』の「国語アクセント類別語彙表」では、「命」類が第五類に分類されていて、平安末期のアクセントは○○●であったと表示してある。しかし、「紅葉」の語は、分属されていない。このように、三拍語のアクセントは、二拍語ほどには研究が進んでいなくて、まだ手さぐりの状態なのである。

ところで、中部日本の方言における少年層が、なぜ「紅葉」のアクセントを○●○△から●○○△へと転換してしまったのだろうか。筆者はそれを、地理的な自然推移と見なして上述のように解釈した。しかし、なお検討してみなくてはならないだろう。

平山輝男博士は『日本語音調の研究』において、青森・秋田・岩手・山形・福島県地方のアクセントには、音調の山の位置が第

第四図　　モミジガ(紅葉が)　　（少年）



二拍めの母音の広狭に支配され、広母音（a、e、o）であれば尾高下型、狭母音（i、u）であれば頭高型になるという（四五四頁）。このことは、出雲地方でも同じであり、広戸　惇博士が「出雲アクセントの特徴」（『方言語彙の研究』所収）の論文中で検証しておられる。二拍語については、第二拍めの母音に作用性がありそうで、W・A・グロータース氏も千葉県の房総半島方言のアクセントでも、広母音が音声変化を早めた可能性を認めておられる。しかし、三拍語以上についても、その傾向を適用できるかどうかはむずかしいところである。同時にまた、中舌母音化の傾向が著しくない地方については、必ずしも適用できないのではないかという問題が残る。中部日本の方言は、東北・出雲・千葉とは異なり、中舌母音化の目立たない地方であるだけに、母音の広狭による音声変化を手がかりにはし難いのである。しかも、「紅葉」は／CoCiCi／という語音構成であるために、第二、三拍めが狭母音であり、従来の知見を適用することはできない。

次に問題とすべきは、金田一春彦博士が、「紅葉」と「命」とを同じく第三拍語の第五類に所属させておられる点である。これは、確かに的確であると考えられる。なぜならば、筆者が当該地域のアクセントの分布を検討したところ、「紅葉」と同じ分布状況を示したのは、「命」だけだったからである。筆者は当該調査で、次の二五語を取り上げた。

血、毛、蚊、帆、湯、歌、音、冬、雲、波、緑、釣瓶、小麦、力、紅葉、甘い、頭、驚く、命、心、背中、誠、盥、薬、蚕

これらの中で、「紅葉」と同じ分布を示したのは、「命」だけであった。語音環境を考慮して用意された二五であったが、結局は、この二語が全く共通の似た分布模様を見せたのである。似ているということは、根本的な共通性が内在するということであろう。「命」は／CiCoCi／という語音構成であり、広母音が第二拍めにきているので、変化が早いはずなのに、必ずしもそのようにはならず、「紅葉」の分布と同じ変化速度である。これは、何か別の働きを考えなくては説明できない。類が同じだから同じような分布を示したのだと言ってしまえば、簡単である。しかし、似たような分布が予想されたので、同類にまとめたのだと言えなくもない。できれば、別の理由を見いだしたいところである。

そこで、筆者は、先にも述べたように、「紅葉」が老年層で、近畿地方と中部地方東部に共通して、同じ●○○△のアクセントを示したのが直接の原因だと考えている。二つの巨大な文化圏が同じアクセントになったとき、中間地帯に広く分布した○●○△のアクセントは、いかに拡大しようとしても、力の差は大きくて、ついに劣敗せざるをえなかったのである。中部日本東部の古い●○○△のアクセントが共通語としての威信を冠して刷新し、周辺に新たな伝播をしはじめ、一方では近畿でも●○○△のアクセントが基礎を置くやいなや、中部地方の全域に「中部方言らしさ」として形を成してきた○●○△のアクセントは、東西からの侵略を受け、ことごとく消えてしまったのである。二五語のうちで、「紅葉」と「命」だけが、東京と京都とで同じアクセントを示し、●○○△になっていて、少年層で、○●○△のアクセントが消失してしまったのは、以上のような理由によるものと考えられるの

である。

もう一つ、明らかになったことがある。金田一春彦博士は「音韻変化からアクセント変化へ」（『増補　日本の方言』所収）の中で、「東京方言の上に起こったと想定されるアクセント変化としては、「「命」類三拍名詞に○●○型▽●○○型というものが想定される。（これもあるいは●○○型のまま変化しなかったというべきかもしれない。）」と述べておられる。筆者の提示した言語地図一から四で明らかなように、中部日本方言では○●○〜●○○へと変化したが、中部日本東部や東京では、●○○のアクセントのままであり、変化しなかったのである。

（2）柴田武博士の「愛知県のアクセントの分布」と筆者のとの比較

柴田博士の調査は、昭和一三年から一八年まで、国民学校第六年生を対象にして実施された。その結果、○●○△と●○○△との境界線が次の二地点間を結んだ所を走ることが明らかになった。すなわち、渥美半島の伊良湖／和地・福江、東三河の三谷町／大塚村、奥三河の下津具村溜淵・豊根村三沢／田口町・御殿村に走るとされている。この境界線は、正に第三図の境界線と同じなのである。また、第一図のとも同じだと言ってもよいであろう。柴田博士の調査から五〇年が経過し、その当時の子供たちが、現在まで全くアクセントを変えないできていることを示している。

しかし、第二図での少年層は、柴田博士の調査から二〇年後であるが、すでに全地点で○●○△から●○○△への著しい変化が始まっている。そして、第四図の調査は柴田博士の調査から五〇年が経過しているが、これによると、○●○△は完璧に払拭されて、●○○△になってしまっているのである。アクセントは変わらないものの代表と見なされてきたが、わずか五〇年の周期で、こんなに交替することもあるということを認識しなくてはならないであろう。

（3）「紅葉」のアクセントが○●○△から●○○△になったのは、果たしてテレビの影響や共通語教育の影響であろうか。

先述したように、馬瀬良雄氏は長野県でのご調査を踏まえて、長野県での○●○△から●○○△への変化を、少年層に対する教育の影響だと解釈された。確かに少年層で専ら推進されるこの変化の原因について、教育の普及をあげることは容易なことである。しかし、教育やＴＶが一般家庭へ普及したこととアクセント変化とを結びつける根拠が見いだせないであろう。また、老年層はＴＶを見てもアクセント変化への影響を受けないとしてしまうのもどうであろうか。さらに、テレビのアクセントの象徴として、●○○△をあげることができるのであろうか、という疑問が浮かぶ。

馬瀬良雄氏は「紅葉、涙、めがね」の三語を調査され、それらが少年層において著しい●○○△化を示すことを指摘された後、特に「紅葉」について頭高化が顕著な理由を次のように言っておられる。

「先日ある会の席で、一人の教師が「もみじ」は●○○と教えなくても従来の○●○で良いと思うがと発言した。その教師に

「涙」「めがね」の共通アクセントを尋ねたところ知らなかった。つまり、「もみじ」は他の語と異なりそのアクセントが教育の場で問題となっているのである。こんな点に教育による影響を考えたい。」（注・本文の片仮名を○●に変えて引用した。）

確かに、天下の教育県として著明な長野県ではあるが、●○○△のアクセントは、第二図や第四図でも見られたように、中部日本の全てに及ぶ傾向であり、教育の影響とは言えないであろう。少年層が●○○△のアクセントになるのは、教育の場での問題ではなさそうである。それではどんな理由を考えたらいいのであろうか。

平山輝男博士も「音声教育の体系と方法」（『国語教育のための国語講座　2　音声の理論と教育』所収）の中で松本市方言と共通語とを対比させて、○●○が松本市方言の特色であり、●○○が共通語の特色であると記しておられる。テレビのアクセントには、種々の話者がいて、それぞれの個性に基づいて話している。頭高化をすぐに共通語化と心得て、少年も教師もテレビの影響だと考えたのであろうか。頭高化を共通語の典型と考えるならば、最近の平板化アクセントもまた首都のアクセントの特色であり、共通語の新しい傾向と言えなくもない。しかし、頭高アクセントだけを共通語のアクセントと見なし、平板化アクセントを考慮しないのは分かりにくい説明である。

そこで、平山博士と馬瀬氏があげられた語を検討してみよう。

「紅葉、涙、蕨、眼鏡、枕、命」

の六語は、金田一春彦博士の『国語アクセントの史的研究　原理と方法』によれば、「蕨、眼鏡」を除いて、第五類の「命」類に所属せしめられている。筆者の検証によれば、「紅葉」と「命」とは全く同じように、少年層で●○○への変化を見せているので、テレビや教育とは無関係に、類別語彙の支配を受けることは十分に了解してはいる。しかし、そのこととは別に、言語変化の原因は存在することも確かなのである。

筆者は、第五類の語彙にみられる●○○△化の傾向の原因を、先にも述べているように、東西二大方言のアクセントが同じ型の●○○△を示して、多くの場で使用されたために、地方毎に独自な変化過程を辿ってきた種々のアクセントが消失してしまったのであろうと解釈している。なぜならば平山博士や馬瀬氏があげられた六語は、すべて東京と京都での現在のアクセントが同じ型になっているので、●○○△は決して共通語アクセントだとは言えないからである。●○○△のアクセントは、「紅葉」について言うならば、無アクセントを除いた全国方言アクセントの型だと言えるであろう。言い換えれば、マイナーなアクセント（小数派アクセント）でなくて、メジャーなアクセント（多数派アクセント）に乗り換えたのである。そのような無意識で作為的な判断が見える。

しかも、もう一つ大事な点は、中部方言のアクセントでは東京と京都とで現在、個々の語のアクセントの型が同じなのは、「紅葉、命」をはじめとする第五類のアクセントだけである。●○○△のアクセントが広く日本の中核地帯に分布する様は、壮観である。他方、東西方言アクセントの型と異なるアクセントは、中部日本の各地で、実に多様な型の分布を見せた。しかし多様な弱小

の分布を示すアクセントは、優勢な型に統合されることになったのである。優勢な型が劣勢な型を吸収して一元化する状態を、ここに見てとることができたのである。

まとめ

以上の論をまとめると、次のようになる。

(1) 各地点毎に「紅葉」の異なったアクセント史が認められるが、中部日本全体を統一したアクセントの現代史を描くとすれば、表2（本頁左端）のような循環論になる。

(2) アクセントは変わらないものの代表と見なされてきたが、「紅葉」のような語においては五〇年で完全に世代交代をするものがある。その事実は、柴田武博士と筆者の調査結果を比較することによって、証明された。

(3) 「紅葉」のアクセントが○●○から●○○へと転じたのは、テレビや教育や共通語化の普及が原因ではなく、「紅葉」が東西二大方言アクセントと同じ型（●○○）に転じた結果、少年層がその優勢な型を選択し劣勢な型を継承しなかったためであると解釈された。世代差と地域差との二つの要素が複合的に作用して、変化を促進させたのである。

東西二大方言アクセントが同じ型（●○○）を示す「紅葉」の分布について、共通語の方が古くて、近畿の方が新しいと解釈した。その根拠を渥美半島の先端の伊良湖のアクセントの揺れに設定した。しかし、この点については、なお、見直すべき点もありそうである。

表2

●●○△　↓　●○○△　↓　○●○△　↓　○●○▲　↓　○○○▲　↓　●○○△

○●●△　↓　○●●▲　↓　●○○△

〈参考文献〉（五〇音順）

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊『日本語アクセント史総合資料　索引篇』（東京堂出版、一九九七）

江端　義夫「中部地方域方言の推量表現の分布」（『国語学』一一〇、一九七七）

江端　義夫「中部地方域の方言の打消過去表現について」（『言語研究』七三、一九七八）

江端　義夫「「が」準体助詞の遺存分布考―主として中部地方域方言について―」（『国文学攷』七九、一九七八）

江端　義夫「禁止表現の多元的分布―中部地方域方言について―」（『国語学』一二五、一九八一）

江端　義夫「中部日本の語アクセントの地理的分布考」（『音声の研究』一九、一九八一）

金田一春彦『国語アクセントの史的研究　原理と方法』（塙書房、一九七四）

金田一春彦『増補　日本の方言』（教育出版、一九七五）
国語学会『国語学大辞典』（東京堂出版、一九八〇）
柴田　武『文字と言葉』（刀江書院、一九五〇）
西尾　実・時枝誠記『国語教育のための国語講座　第二巻　音声の理論と教育』（朝倉書院、一九五八）
服部四郎「国語諸方言のアクセント概観」（『方言』一一一、一九三一）
平山輝男『日本語音調の研究』（明治書院、一九五七）
広戸　惇『方言語彙の研究』（風間書房、一九八六）
馬瀬良雄『言語地理学研究』（桜楓社、一九九二）
W・A・グロータース『日本の方言地理学のために』（平凡社、一九七六）

（一九九九・一・二二）

（広島大学）